

俊寛僧都鳴物語
 六

天保

^ 13
 3140
 6



13
3140
6

昭和九年九月十二日
購求

俊寛曾都嶋物語卷之五

駿河志七

東都

曲亭馬琴編次

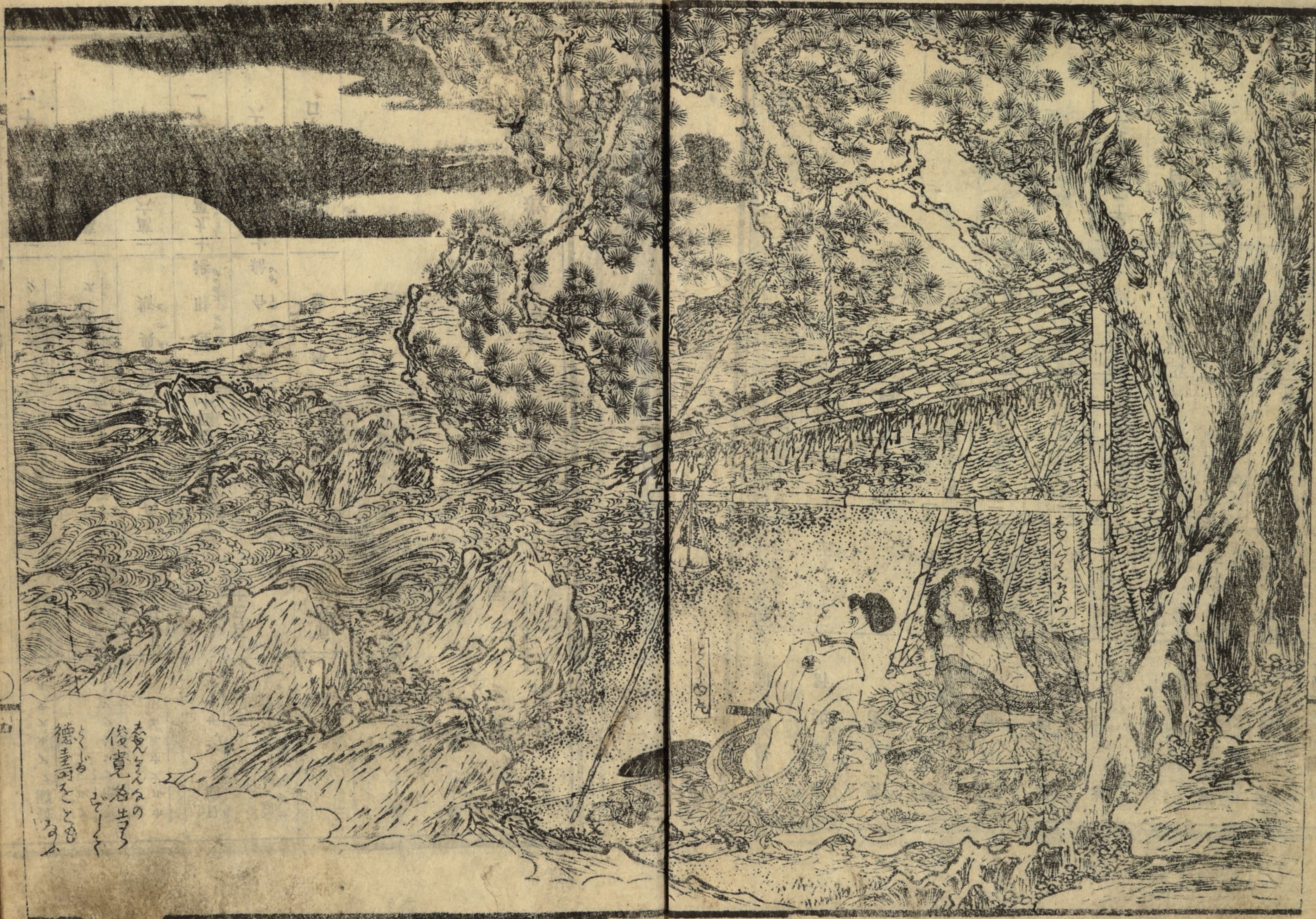
富士套

抱笈露宿と云

俊寛僧都が事

山田守りてつづつて悲しけれ秋果ねを稀にけりとも父とも名吉
あつどいと強顔の敷符かち。いよふかよ名残惜れり。俊寛ハ徳壽丸を伴ふ
茶の居らそ臥猪の床よも茶屋よりれ竹を柱に松を簷海菴を直しと
らりしれど雨はこゝろ漏り月の影さつひのふらして憂もむせぬ索簾よの
紫うららと席と僧都まが肉入りり臥あへば改と足外は知を京童が
とまゝに雛物の小屋とて他まらむ。あまをあらわらり。海なるあまの
人膚まら。乾る木の葉を搔ゆ。まが子を其処に坐らしり。徳壽丸ハ
つゞと海より出る月をえてあれが路のあまらんと。とてはまらる更らるや。姥

とる薛あるは道べし。さうく此を薛の遺止が北野の神のあん致も。
とらる。体の道よりひるが。わいづも。たぐうん。彼菅家の天眞
とら。寛柱を脱まありぐ。況名利のなき世を乱さんと計校し。計校
又相治れ微生か。橋梁の信を盡し。その職もわうさる。兵士と自ら
比攻伐合戦の隠謀。加じい。其のくさるう。釀せ。禍。前四の悪報を
今生よ脱まぞ。たうれば。今生の悪報を。今生よ果せる。は。車。頼あり。
経く。敷く。く。と。僧。常。宜。ひ。た。さ。ふ。か。り。何。と。も。一。勢。天。を。も。外。は。ど。
人。を。も。う。う。と。あ。ふ。る。と。可。嗚。乎。説。示。ま。げ。後。ま。九。く。く。と。う。ち。笑。く。父。の。志。の
と。あり。と。も。その。妻。の。ま。く。り。の。天。命。と。と。父。の。流。罪。を。数。さ。其。の
と。や。作。る。は。母。前。今。般。の。送。言。も。つ。が。魂。ハ。薩。麻。方。鬼。界。鳴。こ。あり。と。志
と。追。薦。も。也。流。経。も。也。朝。の。雨。は。梳。ら。又。露。又。宿。を。投。ぬ。死。也。あり
と。父。上。の。妻。名。を。も。同。年。より。恙。も。た。面。貌。を。と。る。と。も。わ。う。と。も。は。母。が。か。ら。善。知
織。の。回。向。も。也。そ。う。は。果。を。わ。ん。づ。ら。と。宜。い。と。言。語。の。身。底。は。苗。を
と。も。今。の。ま。く。よ。あ。あ。う。う。と。加。え。女。兄。又。母。の。と。又。結。髪。の。ひ。一。脚
曹。司。の。も。と。さ。へ。い。い。と。出。り。後。卿。の。後。半。は。植。ま。よ。女。の。身。の。悲。し。ま。悲。し。と
と。の。ま。り。と。鳴。ま。り。も。も。お。い。え。女。良。子。を。お。そ。く。水。は。あ。り。黒。居。三。郎。が
お。れ。を。と。め。と。め。を。あ。る。日。を。始。め。わ。う。ん。と。れ。を。あ。ま。く。よ。ま。さ。と。と。て。佐。右。の
と。も。と。通。子。の。ひ。一。の。消。息。を。改。誓。の。中。に。結。り。と。て。と。と。れ。と。父。上。の
姉。兄。も。世。よ。り。入。と。す。り。あ。へ。が。維。め。り。ん。と。ん。紀。念。を。今。の。代。に。れ。れ。ら
く。い。忘。る。際。も。あ。り。ね。べし。と。口。傾。き。袖。り。ら。か。る。又。と。り。出。人。油。染。と。り。一。封。紙
主人が。枕。子。よ。は。し。と。と。と。父。上。と。も。あ。い。と。も。あ。ん。身。の。書。簡。を。と。る。と。も。同。胞
の。志。を。果。さ。し。と。と。と。と。ん。や。九。別。よ。う。果。子。野。准。治。し。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。



志見とんどの
俊寛名出
徳重河をこ
る

修實卷之七

とてまじりたる。案の前か、忍難波の邸経房を移す。反し、兼又本親の
の仇を報その身もやぐ。自殺せしむ。よは、後妻が母ありり。又いと憎
の鶴の草かごとり。結髪たり。牛若丸のみ。一一夜も添臥せど。底は
硯の海。筆の命。命を倅おとす。墨乾のゆ。鳩つ鳥。迹の鬼界。かたつとも。
今にまぬた玉草も。形見よとと。枕方ある。書筒ののろを封皮。一剪
月を燭。よ。続てを。手迹愛せられたり。書のは。涙は。毫をまひて。あ
ごりの書。ざりり。大悲山の林鹿。ある。寺々の。寓居。蟻王夫婦。それ。留書。始り
介抱せり。れ。日の。終。日。薄の宿の。ほ。ひ。対。ひ。て。後。暮。し。夜。の。終。夜。光。細。き。燈。よ
射。す。後。あ。く。作。り。り。よ。母。也。お。俄。頃。よ。あ。り。あ。ひ。も。ひ。の。牙。の。所。と。あ。り。中。ら
よ。牙。が。ど。の。と。よ。若。く。り。り。の。便。宜。よ。塙。を。出。く。密。よ。あ。ん。の。の。り。あ。れ。り。と。
書。る。を。流。し。て。巻。く。顔。よ。あ。る。を。忍。び。後。ら。り。り。の。後。の。あ。れ。り。と。

涙を押拭。心。亦。彼。良。袖。を。も。よ。う。て。ぞ。く。う。ら。ち。は。た。さ。る。も。の。袖。の。裏
み。福。壽。海。を。量。大。妙。と。書。つ。る。の。鶴。の。前。の。は。名。あ。る。へ。い。實。よ。入。の。世。の
墓。あり。壽。福。を。鶴。龜。の。鈴。ひ。よ。擬。て。その。子。の。名。づ。く。て。生。あ。る。め。の。の
必。と。死。あり。生。と。死。死。し。て。又。生。る。と。の。あ。れ。ば。と。く。可。く。も。書。く。と。あ。る。あ
も。あ。る。ん。去年の。落花。が。根。よ。帰。ま。う。今。年。梢。よ。定。め。の。あ。り。梅。花。の。蓋
も。短。し。と。り。日。の。老。樹。稚。樹。の。差。列。も。終。の。蔭。と。あ。る。あ。の。を。喜。怒。哀。樂。し
羈。を。と。す。歎。く。の。愚。癡。の。至。り。妻。子。珍。宝。及。王。位。臨。命。終。時。不。隨。者
と。大。集。経。も。現。れ。る。よ。れ。懸。は。頸。身。の。息。あ。れ。ば。物。を。り。り。へ。の。こ
や。最。期。を。の。を。ぐ。ん。と。く。曝。す。る。牡。蛎。の。殻。を。拾。ひ。て。竹。の。柱。よ。首。の。下
を。書。き。送。く。流。本。の。杖。よ。推。乃。つ。む。び。づ。も。あ。か。さ。や。曉。方。の。礧。山。下。此
と。負。よ。入。り。種。多。九。の。忽。然。と。目。を。覺。え。り。主。人。の。窟。の。内。よ。坐。ら。せ。竹。杖



墳墓を
不_レ辭_レし
片袖東_ノ
赴_ク

僧都の再會の空を遂ぐ。おどろりの忠孝を盡さんとどひりもの公は

もろもろのれうや尻の波の底六魚の腮よかりあつた夫わが主従が至る

孤忠ちろしゆせん幻の境は面影をえせり。只一に蛟王も徳妻も

ひてまはさるんぶたつちりと叫びつ忠臣孝子が身をとりあへく

は後哀傷やうらうり。實まやらの如く鬼界が嶋とまらるれば鬼の集

るところま。今生あての冥土あり親子の一世の契とらば名告わ瀬の

らざりせもくた迹吊ゆるんま。主従練ゆ練らん杖と履を推りて

舊の嵐はまろつりの件の二品を埋め。墳墓小松歩た砕世の牙をうめ

し井の柱を建。卒於婆は楨小松を裁き墓標と久の松今あは

茂しと千載不朽の右迹とありぬあし徳妻丸の蟻王りるとも又の住

まをぬゆる。嵐の中は起臥し。毎日墓を掃掃ぬる。木をたて

る程は蛟の前の七日はあひぬ。うらうら像見の隻袖を小松の松より

る。念仏百遍うらうら唱る向は怪しんか。の目の浦風さうらあ

うらうら彼袖を雲井逢は吹揚。翻翻とく東へ靡ゆ。飄々とて天

鳥よ似しりく徳妻丸のま。蛟王も眼前の不思議をえく大は

た。それを追ふよその後ろををうらうら。原末鶴の前の亡魂彼袖よ

うらうら。主従は先づうらうら。東へゆりあつた結髪の君を慕う

は。どうあへ。宴は貞女の節操その憂苦は堪えて生あが石と化

死しうは。子を産する類和漢よその例多し。あつた痛いと結

つて繁き花。くもた魂らうら。一隻の袖を失ひてうらあ

袂を濡しうら。うらうら。彼妻丸の父の初月忌も果よりれば蛟王も

硫黄膏は便取し。うらうら。の下院は太陽る。畔の瀬白は内着し。十月の中

前より後よりゆり来られざる守谷へ赴けり。其の危るべしと。蟻王
 がやうに仁し主従遂に越前國水江の庄より来た。黒居二年を移ふ
 事の昔よりねどねの二年と前より自殺しつゝと見住人の町響を
 蟻王のつらよもあて又が最期の景迹と兄亀王渡海木が縛の越
 を審よりつゝ大に怒りた。其の悲しき堪む。彼事九かふらよひ
 らへて。浅やん子けん又物あり。まゝ蟻王とわも黒居が墓に訪あふ
 蟻王のつらよ物をもひこす。久く父は信より。憐を悔歎に在る親物
 いふ。つらに死に親をも埋めれ。まゝ主従は。憑む樹り。雨は。偏り。水
 びよも苗より。彼此よまのびつ。終よ吉田郡の内。大目山の南ある山里
 隠を住をり。洛の風声をひききん。その年。わら。つ。暮し。これ
 後。四の山を。別山。越前。と。名。と。後。其。は。後。

まゝ。つらよ。且く。籠し。固。欽。又。木。芽。巖。と。湯。尾。巖。の。向。の。山。の。名。よ。負。し。あ。ん。
 名。不。し。れ。れ。又。蟻。王。が。程。強。く。故。を。帰。し。つ。つ。を。山。の。名。よ。負。し。あ。ん。
 と。い。ひ。親。あり。水。江。の。庄。の。り。の。郡。よ。属。する。や。今。詳。あり。と。序。あり。と。
 彼。國。の。人。よ。と。づ。ね。べ。し。

第十三套

抱脚摘督とい

案山四郎が事

明皇が治承四年夏五月の比。越路の良賤風刺を。その由。源
 三位頼政入道。去。年。治。承。三。年。六。月。十。五。日。祝。髪。その子仲綱朝臣又子頼
 平家を。怒。る。と。あり。今。茲。五。月。十二。日。三。條。高。倉。宮。以。仁。親。王。よ。御
 隠。練。を。勅。め。奉。り。し。か。その。り。忽。地。平。家。へ。ま。え。を。豫。の。計。畧。合。期。を。
 頼。政。卿。へ。一。族。と。り。ふ。宮。守。護。し。南。都。を。投。し。つ。退。く。この。日
 宮。を。い。つ。疲。勞。ま。り。ひ。つ。四。つ。五。つ。落。馬。し。ひ。つ。が。姑。く。宇。治。の

平家頼朝の孫平朝宗、橋を三間ぶらり敷く、寄る敵と禦んとす。
 時、五月廿六日、平相國清盛入道勅を奉り、左兵衛督知盛、義人
 頭重衡を追討使とす。相後、一族郎後十餘人、その勢都合二萬餘
 騎。宇治川のこの岸に立聚ひく。矢軍の時をうけて、平家
 川を渡さんとき、水は濁り、軍兵少く、たゞそれバ仲綱朝臣
 伊勢武者の盛衰記は白多々火をうける。禮をうけて、宇治の綱代
 安く、成り得え、是利又太郎先陣し、その後、二百餘騎、向ふ岸へ
 ささけり、あがりて攻戦す。後、早雄の兵等、さき方、ささけり、初
 源平入乱、ささけり、挑を戦ひ、さき方、早雄の兵等、さき方、ささけり、初
 る。射まど、あがりて攻戦す。後、早雄の兵等、さき方、ささけり、初

ハ、つとむりひひひれ、ささけり、早雄の兵等、さき方、ささけり、初
 埋木の花ささけり、ささけり、早雄の兵等、さき方、ささけり、初
 と、孫のあど、腹うた切、ぬし、そのと、頼政の郎黨、下總國の住人
 下河辺藤三郎清恒、主の首をうた、落し、直垂の袖を包み、板敷の
 上板をはなれ破りて、それを隠し、ささけり。
 ○斯くも終

そのと、頼政の郎黨、下總國の住人
 下河辺藤三郎清恒、主の首をうた、落し、直垂の袖を包み、板敷の
 上板をはなれ破りて、それを隠し、ささけり。
 ○斯くも終
 下總國は落さず、古河のほろり、主の首を埋葬さす。その後
 猪俣太が子孫、古河の近々、在住し、遙く星霜を經て、武義
 岡崎玉郡、大田の庄に移住し、その地、今の川口村に在り。

平家頼朝
 源盛衰
 記事始
 の合戦は
 猪俣太が
 子孫は
 武義

此一説故ありて。予が家の口碑又傳を久し。うてそ併記の。

用より。主永享保の同。海世傳々々。その名祖世と云はれし。羽川 孫重の馬基の傳
族々。祖又の馬の叔父なり。家人傳の大田の庄は生と兼子にれ。姓を太田と申む。
字を孫五郎。三同と号す。壯年より江戸に住し。又下徳田葛飾郡。川妻は世永に
孫重のさへ傳ある。印の草紙。今も傳のらる。生 雁立 爪上 浪人 かくをりぬ。室
曆四年七月廿二日。墳墓は江戸
下谷地。端。東圓禪寺あり。

武者物結よ云頼政卿。平等院あり。討死のつら。郎當

借恒 隼 太守
賢ホ多かれべし。み討く。コカ白骨を平等院よかよびべく。以 院

袋よ入し。諸國を修修せよ。我まするん。と心知を云く。以

べたれば。其心へ埋ふ。と云えあはれむ。ひく。郎黨遺言のつら。白骨

を頂よけ。諸國を編歴する。下徳田古河と云はれ。以 院を

おろし。志はしや。とひく。支あがり。以 院をとりて。項よけんとし。れ。と。

おろし。遺言の空し。と云く。以 院をとりて。里人ホと結よひ。古河

村の近所よ自骨をみらめ。彼郎黨中。その何と云は。昔を辨び

と云ふ。心はす。其心は死す。と云。されば古河よ頼政塚あり。今

城内よるれ。彼塚のあり。頼政曲論といふ。

頼政の首を隠し。以 院をとりて。後日よ竹格子の下す。

血の流し。と云く。を怪し。御堂を削ぐ。え。れ。以 院あり。死骸あり。

仲綱の流し。と云く。を怪し。御堂を削ぐ。え。れ。以 院あり。死骸あり。

仲綱あり。叔を死が。の門と云。今よあり。長門平家物結の鏡。又盛衰記。馬基

云。長門平家。と云。仲綱の首を。携り。藤。郎黨あり。し。みや。又

頼政の墳墓。美濃國山縣郡。あり。と十四卷の系圖。又見え。

後 寛文 卷 之 二

軀を埋葬する如也。其日討死の一族郎黨曼一。所經仲綱朝

臣賴政のその子肥後守宗綱左工門尉無綱。賴政の養子

家。賴政の養子木曾。その子義人太師。其後の家臣に至りては

毛筆に違ふが。宮を幸じて平等院を落させり。光明山へ

おらせり。同流と矢ふ。おん腹を射させ。忽地馬より落りしり

飛彈判官景高が郎黨落合を。後より首をとるなりとを抑

賴政をりしひる軍おろす。その牙はさす。一族郎黨悉討也。

加之高倉宮をむらむひあり。その比人のゆめとど彼宮の令

高むりしよりて。猪國の源氏蜂起して平家の終よしびあり。賴

政のくせが賴朝といふとも。後より伊豆の肥所より老死むりしゆも

む成とまらざる天く。令あり。賴政賴朝その武勇よりして甲乙

うるべし。嗚呼源三位入道の。その國の陳涉なるる。

言の序より。この書算二卷二十三張。三十卷の系圖又根元

多田義人の綱。安藝國へ流されし。記せし誤之。みづひ十四卷

の系圖又考索する。藝州へ配流する。綱の子終定之。とて

三十卷の系圖の錯悞多し。又その初卷に記しする。三近子の傳

も。おひひしかへきり。末卷よりとて。こぞふお

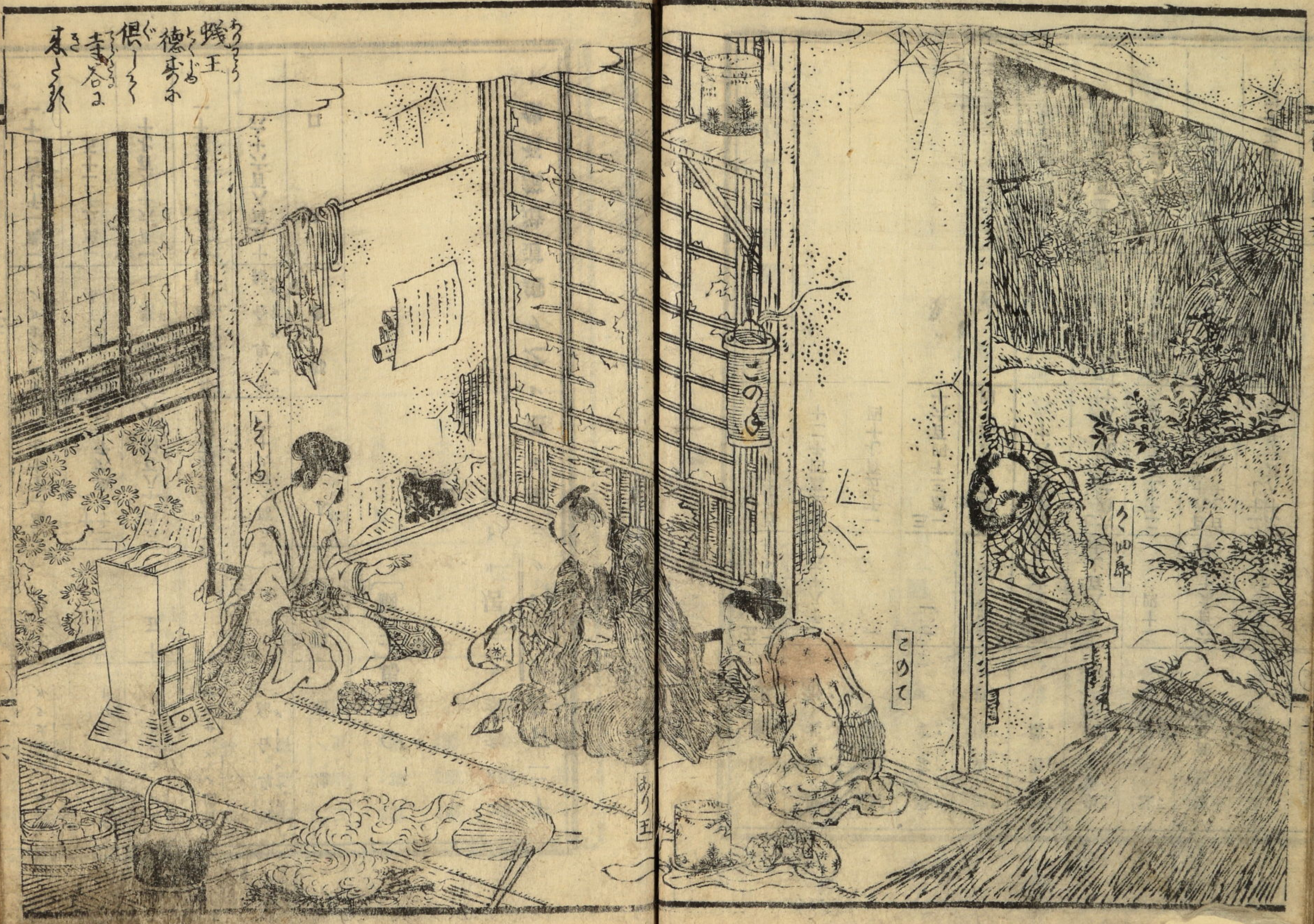
間結休題。さても黒居蛭王の德壽丸に倣て。去年の冬より越前

大日山の間より。深く潜びて居たり。源三位賴政入道高倉宮を劾

する。平家を討滅さん。既に彼宮の令旨をせしむり。猪國の源氏

へ謀り。ののむり。灰に傳ゆ。竊に飲び。德壽丸にまらざる。平相

あつち
踐王
徳
俱
寺
来



後
山
...

...

と
も

こ
り
て

く
し
郎

あ
り
王

見か安否を入つくるらであはしめんと神佛に祈願し夫の憑もよ

まど夫はうらづよはけくはやくするものなりし。さきゆその後

何知り濁びのひらる。一年あつたんまのせぬ。雅公の女あり

とほぞや。鶴の前へ。さきゆり終たあは来ぬらざる。安良子への

いひ来せり。のらりし致。書翰あはばえし。いり同は戦王

恋べ言言語ああで。望は眼をむをたれ。かづ何そまうまき。か

あまうて。いし胸うく。さそい。鶴の前安良子の。まうぐのり

宮津の浦ま主後りらとも。槽械の露と消する。去年の二月七日

夜のう。か。某の雅君のおん供。なぐと鬼哭鳴は推。うい

あ。僧都のあ。刃の窠く。はを羞むひる。終は名告ゆあひり。

竹の柱は歌を遺し。浪の底は懐もひる。加之。ふ。里。三郎の

な。り。く。自叙。と。は。ま。え。く。故郷。中。住。と。ま。え。く。荒。ち。れ。ど。男

姑。人。係。思。せん。と。思。ひ。ま。は。是。知。の。洛。は。移。遠。う。ね。ば。ら。る。る。の。と。音

耗。せ。む。去。年。の。冬。う。誠。の。山。里。は。主。後。ふ。く。難。ひ。く。行。く。此。度。源

三位入道。ま。ひ。企。う。り。あ。う。く。諸。國。の。源。氏。は。謀。し。あ。の。さ。う。う。伝。傳。々

あ。旨。あ。る。あ。忍。ま。雅。君。は。俱。し。あ。わ。ら。せ。ま。の。な。ひ。ひ。か。と。い。ひ。け。く。外

面。を。え。り。り。見。の。手。の。か。く。の。笑。く。毎。は。胸。ま。の。い。く。塞。う。く。外。は

あ。ぬ。急。雨。の。降。そ。ぐ。袖。を。絞。り。ゆ。あ。む。ふ。一。流。う。う。ま。や。し。改。を

擡。く。目。を。拭。ひ。思。の。為。は。命。を。損。む。女。兒。安。良。子。ら。の。い。さ。う。ふ。の。い。さ

は。痛。し。の。鶴。の。前。ら。ま。在。り。伎。術。は。結。髪。か。し。ま。う。う。新。曹。司。は。再

會。の。よ。う。が。あ。ら。し。と。歎。ま。の。ひ。し。あ。面。叙。の。今。ゆ。の。志。ま。ん。と。ま。れ。と。思。れ

から思。ま。の。為。は。安。良。子。が。家。を。離。れ。親。を。別。れ。あ。れ。く。く。ね。首。途。を

由ら。そと。さう。たりのよ。つり。潮光毎。早。走。り。小舟。は。似。し。世。渡。へ。う。つ。て。く。ら。も。と。田。舎。さ。う。せ。ん。德。壽。丸。微。笑。ふ。それ。へ。あ。ま。う。り。を。く。首。掃。子。致。し。て。さ。し。その。小。刀。さ。く。腹。の。切。り。う。い。と。死。に。け。り。ま。り。と。宣。ん。を。見。の。手。婆。の。い。ひ。も。あ。い。さ。る。思。く。し。た。る。宣。ひ。と。此。も。り。あ。り。難。波。三。郎。経。房。が。親。族。郎。黨。日。夜。緋。細。く。と。の。び。く。雜。君。の。死。在。知。を。索。ね。主。の。寃。を。報。ひ。て。平。相。國。の。脚。感。よ。あ。ぐ。う。ん。と。と。と。風。波。あ。り。ゆ。れ。は。あ。か。ぬ。久。し。く。苦。め。あ。わ。た。か。に。あ。り。ま。る。近。曾。洛。堀。川。の。舟。と。り。今。出。川。鬼。一。法。眼。美。圓。と。う。唱。し。多。ふ。軍。学。の。達。人。あ。の。死。を。あ。ら。う。の。舟。り。來。す。く。洛。も。る。舟。旅。も。ま。ど。花。尾。り。め。く。く。か。ん。く。櫓。門。高。く。構。へ。り。時。め。れ。あ。る。虎。の。巻。と。や。ん。ひ。世。も。も。稀。る。書。籍。も。も。野。雉。め。め。の。ふ。衣。あ。り。と。と。早。相。國。あ。る。や。あ。食。て。その。虎。の。巻。え。せ。し。と。く。あ。ぐ。く。兒。使。を。あ。れ。だ。も。後。に。あ。ら。う。む。い。と。う。さ。

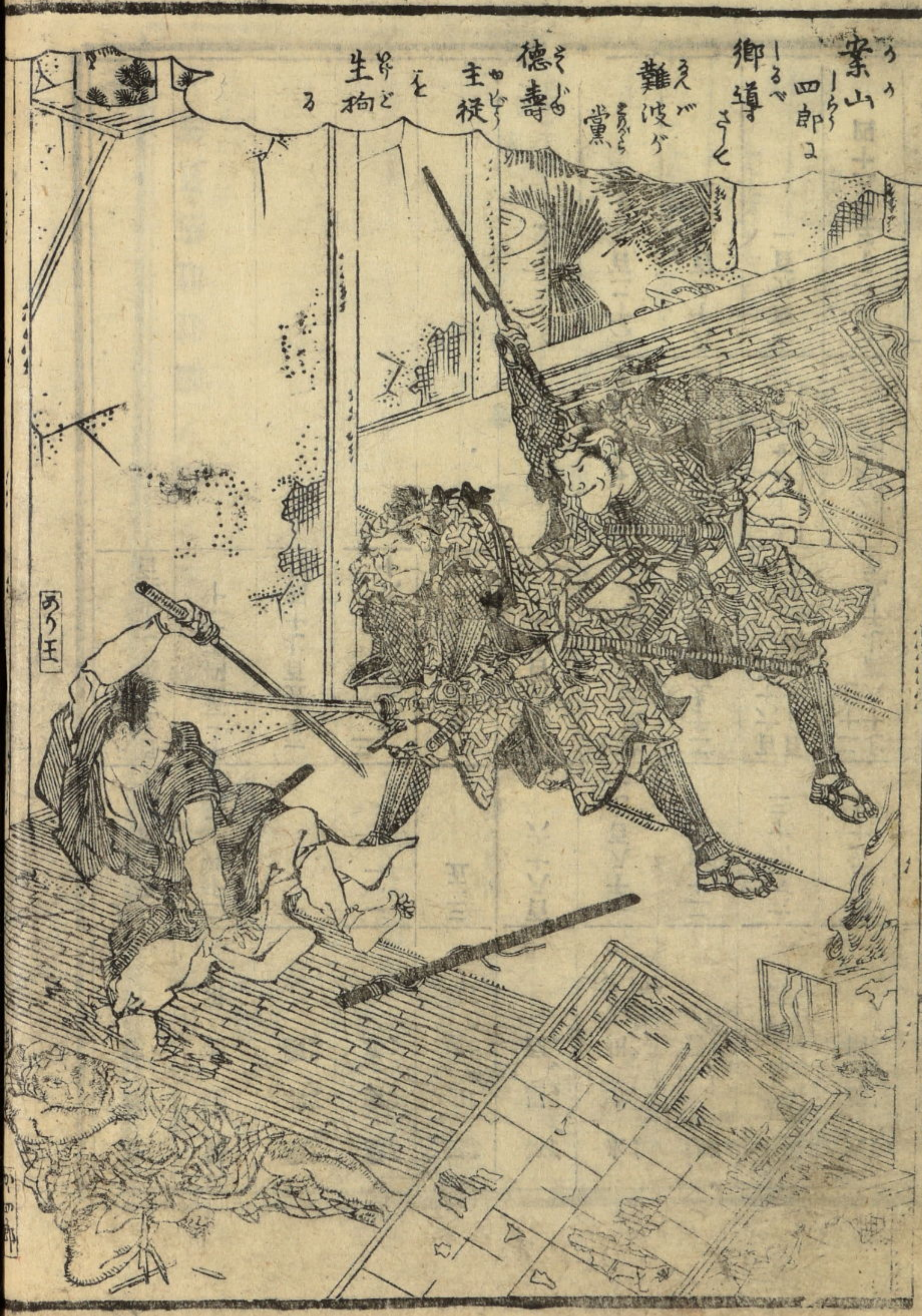
とい。い。ぬ。月。より。大。悲。山。は。別。荘。を。後。理。て。田。居。し。ぬ。ま。り。又。彼。鬼。一。法。眼。少。の。弟。子。は。白。河。の。湛。海。と。呼。ぶ。悪。僧。あ。り。あ。の。の。不。夫。不。當。の。男。一。人。當。ま。の。手。煨。煉。あ。く。平。家。の。侍。を。扇。と。せ。て。異。形。を。打。粉。し。と。毎。日。夜。い。く。と。彼。此。を。慢。妙。し。ま。ら。ぶ。お。の。障。意。奉。進。と。ま。り。は。ま。り。大。悲。山。へ。の。遠。く。を。り。縁。を。徴。く。件。の。鬼。一。を。憑。り。か。難。波。か。黨。も。御。ま。り。て。さ。し。よ。ま。り。隱。家。の。あ。ら。い。と。さ。し。早。に。さ。し。や。と。密。結。折。り。外。面。よ。人。の。笑。音。し。と。門。の。戸。を。破。る。む。う。ら。う。ら。敲。き。兒。の。手。婆。の。在。る。故。宮。野。谷。も。村。長。の。嫁。の。産。の。氣。つ。た。り。今。も。生。る。や。う。あ。り。さ。し。く。來。る。と。叫。ぶ。う。ら。い。兒。の。身。の。煮。つ。さ。う。あ。く。由。出。で。阿。抄。の。さ。う。さ。う。の。使。う。る。や。う。む。人。の。疑。ふ。べ。し。夫。紫。山。四。郎。の。例。の。よ。う。な。友。だ。ち。と。酒。喫。あ。ら。う。出。た。れ。ば。聖。の。朝。ま。る。か。歸。る。ま。り。ト。誓。だ。め。う。く。門。を。鎖。し。と。雜。君。と。

後覽卷之二

一

秘蔵し、すなわちせむ。蠅ハ納戸は垂くわり。かてを帰る亦つぎれや。いハ
 間由る角をバく。門は多をひきりし。葛籠を関く粘息は草衣
 被更く忙し。帛紗包を搔抱き裳を褰く門の戸を羊角丸と礮と
 団件の使は綉川止。宮野谷を投く走まり。ふむし由おむむ蠅王ハ
 門の戸鎖く住るれ。男の家由今さら。又旅するれば草枕長途イ
 疲勞し徳壽丸を納戸の臥床へ冊き入止。舊の知へ立出く。物おハ月ハ
 いとしく。更闌るまむも秘く止む。孤燈又さし對ひ顔又嘆息をくうる。
 右左程は案山四郎ハ甲夜は門をぬり来る。蠅王と兎の子がうら相結
 る。一五一十を竊聞く。ふう、歎ひおく引之く難波ハ黨は徳壽丸
 主役のふを告ふし。おの是案内く。捕手の兵士を門田のうら孫ハ
 お免か一人を宮野谷の村長ハ使し打扮く。兎の子を流引し。お免
 ハ色を滑り壁を穿く。簀の子の下へ潜び入る。内の守りを張ひけ
 こもあふむく。蠅王ハ今めや掃く。姑をむく結ぶむほくくと。

遠寺の鐘を数とば。んや丑三ツよりより。折し由西れ門の戸はく。
 うら敲き。案山四郎起り。婆を送るく来つて。宮野谷より。関
 更ら関の。門ハ。と懸て蠅王ハ履脱し走るを。門の戸はく引
 関より。おむかハ捕手の兵士。ひくくとまき入り。や声くく組人ど
 を。ろろ招く。蠅王ハ。定を飛く。撲地と蹴し。続々葛籠はく
 廻る。左右へ撞と擲退。おの紐著を忘る。柱を。後さよ。簀の子の
 関く。飛く。裾引折。短刀を抜く。防を幾し。過く。隻足。簀の子を
 踏破く。さよ。とむく。突く。膝を。忙し。立る。海く。お免。足を脱んと
 する。簀の子の下る。案山四郎。潜る。うら。蠅王ハ。定を抱き。引く。放



案山 四郎
御導
難波 党
徳壽
主 杖
生 柵

徳壽 案山

徳壽 案山

蠅王の猛りとて。敵は不用意の罅あり。是より
 又を挑放ち。面より脊より。手を投改。髻を纏。やうや縛り
 ぬ。其間。案山四郎の篋の子の下を。脊門口へ。蹴出。納戸は取
 徳壽丸の襟上。廻く。瞬の刻へ。引揚。驚を惑へ。改三。四。巻。焼
 しま。打。控。が。て。い。く。縛。め。宙。引。立。つ。穴。天。窓。蜘蛛の網
 垂。う。く。ま。り。ま。は。捕。手。の。兵。士。只。管。又。稱。嘯。一。寔。は。汝。か。今。夜。の
 働。さ。更。は。比。ふ。べ。れ。物。有。抑。か。主。難。波。三。郎。経。房。ぬ。曩。は。恨。く。
 案の前。は。欺。也。果。敢。く。撃。止。め。ひ。く。その。不。覚。を。責。ま。せ。め。ひ。て。
 親。族。郎。黨。は。平。相。國。の。氣。色。を。蒙。り。ぬ。さ。る。よ。う。く。吾。們。世。は。ろ。く。
 主。の。面。を。お。り。相。國。入。道。の。脚。感。さ。あ。が。う。ん。為。日。夜。必。ひ。を。め。ぐ。り。

徳壽主従。は。往。方。を。慮。の。外。地。は。は。あ。れ。は。寺。谷。谷。彼。ホ。去。主
 の。春。や。う。く。三。年。が。後。隠。居。居。る。は。後。は。夢。く。す。ま。ぬ。め。り。や。と
 て。密。に。地。を。張。め。果。く。く。網。入。ま。り。是。併。各。侷。の。武。運
 の。場。は。あ。ら。う。く。輝。る。案。山。四。郎。か。忠。告。は。あ。り。思。賞。は。大
 波。羅。の。沙。汰。を。強。く。後。日。は。完。終。へ。今。宵。の。賞。残。く。受。け
 ち。え。い。へ。現。ま。り。圓。金。五。兩。を。授。与。へ。遂。は。徳。壽。蠅。王。を。引。立
 せ。薫。火。あ。り。て。じ。り。ぬ。り。り。蠅。王。の。既。は。殘。毒。老。奸。多。學。が。為。こ
 賣。少。ま。る。と。あ。る。と。以。ど。命。運。の。係。る。ま。る。と。お。り。絶。く。一。言。を。ま。え
 ぬ。徳。壽。丸。と。面。を。あ。け。引。隨。は。引。ま。ゆ。く。後。叙。を。案。山。四。郎。の。面
 目。送。り。く。冷。笑。ひ。燈。火。を。く。れ。お。り。件。の。金。を。散。る。又。面。より
 見。脊。より。え。き。く。く。く。よ。る。よ。る。と。え。頼。杖。つ。れ。く。案。山。四。郎。の。見。の。び。

喘く走りく。履脱れく。帛紗包を撲地と投。夫の胸を焚し命。涙を潜然と落し。引ひけり声あり。三律のやうの問。猜し。おん牙人と謀り。嬖を宮野谷へ。呼ぶ。難波が黨。案内。稚久と蛭王を擲。恩を忘。羨も。採る。金を貪り。生涯を過さん。宮野谷へ。思ふ。うら。うら。人。伴り。夜の山崎。捨。宮野谷へ。あ。や。やく。帰る。榎木塚。徳壽君と蛭王が縛り。終。浅す。朽。ひ。男。老。と。牙。醜。救。あ。ひ。ひ。良。人。子。安。良。子。推。量。一。点。違。骨。の。仇。良。人。親。子。安。良。子。過。世。の。契。あ。れ。親。子。安。良。子。ハ。去。年。の。春。大。死。う。楽。丸。百。遍。千。遍。恨。を。解。身。の。罪。勸。解。胸。を。捨。放。り。冷。笑。ひ。入。夫。れ。年。末。北。鷄。又。晨。を。ほ。せ。早。稻。穂。何。れ。も。あ。れ。時。宜。し。武。士。あ。も。案。山。四。郎。が。老。木。の。初。花。頭。の。自。も。赤。く。も。黄。金。あ。れ。靡。く。人。情。新。婦。を。娶。り。米。の。飯。を。食。入。と。多。く。言。を。笑。く。耳。ハ。り。這。奴。木。主。従。を。三。年。か。母。を。養。入。る。恩。あ。れ。法。持。寺。の。飯。粒。一。つ。受。入。る。の。絶。り。女。児。が。主。と。い。入。の。安。良。子。を。世。を。ま。り。壻。と。對。し。義。理。あ。あ。罪。あ。め。の。を。斬。り。七。罪。あ。る。又。何。憚。ん。金。を。二。つ。

子よりたれ。さきんそく慾しくひひりどや。と弄賣せたりと泣。慾
ふけゆく夏の夜の煙さ生を合角り。道よりぬ道よ迷ふ夫が
よ金へ仇讐敵どらるる背翁も。さきんそくせばろくくよ世
罪はらふよどかあしど。んるよよいを腹さし。とりたせらるる
んそろく。擲捨る金のひくくと。遠く飛散る山吹の堰堤ありあき
門田の案山子へ礮と常り。落く在処をたれど。案山四郎はたこ
怒り。児の母か改讐を川懸。直は仰さまこち久しく眼を
ア声を濁す。死後まよる麻敷波とが。物おひとれ不と。お
せりたるやある。呼吸絶んと罵り。備るる帛紗色を搔る。打
行ふ包の内なる。脐帯切の小刀の鞭薛。児の手か胸へ。うへ
叶せと。總殖声と。鮮血と。憤る。えりくもせ。案山四郎は
捨る金をそとんと。忙しく指燭し。縁へ。同りと下ろさる。
案山子の弓は弦音し。射る箭も忽地案山四郎か。尾骨
砕れ。丁と立。炎の深焼。叫びもあ。撞と仆ま。死
うり。児の手は苦痛。堪ぬ。いと不審さ。伸あがり。伸あがり
つ。葡萄あ。外面を伝。見え。案山子の簑笠。掻遣捨る。
あ。の。美少年。織漿。薄化粧。狩衣の家高。高
結ぶ。虎の皮の尻鞆。黄金造の太刀を佩。高齒の足駄
空ろ。意気揚。縁の母。矢。杖。杖
児の手は。老女。縁故。彼。仔細。汝。夫の
狗意。狼。練。狐。比。憎。憎
へ。案山四郎。今。一箭。射。殺。周。樂。競



門田の
桑山子
門田の
桑山
四郎
と射る



面の理を示さるのを。詐らざるは。女児安良子とやらんか
主とすのこゝ。鶴の前は縁一結びなる。牛若丸ならん。年既
十九才。私に源九郎義経と名告る。三年あやう。四年の春を
陸奥に暮し。彼地より俊寛僧都が隠流の沙汰をゆめと
いふ。その身容とまづれば。救ふよしあり。その妻子の姓方定
りてねは訪ひうねる。おひこはねどいひもあざむ。時の主多
家一族頼政入道が。おひこをさるるあり。とぞ。猛は走の海
あふ。亦あふあり。これの信は苗子なる。謀りて。その化と
政又子一戦は利を失ひ。宇治河の泡と渚にそ。おんま
情は是かくさる。その地は縣は瀧川と。一みち大悲山あり。鬼
法眼は六つを締り。彼が秘する虎の巻を見え。とぞ。どの
面を對む。よよ。か。一。民の欲する亦をとり。平家の令
運をこゝろ。夜は彼知する。案山子の裏に身を隠し。
巷終街を定めん。と。今夜も。蛾王が物猪
を洩す。鶴の前が世を去り。且僧都夫婦が狂死あり。
そのめり。これを知り。悼まかり。案山四郎が報知する。
難波が黨うせ。徳壽主従を生拘る。おんま。忽地平
家又笑えん。おんま。這奴ホを遣り過し。途は追ひ。面て
彼主従を救ひる。ば。全の謀。と。深念し。手を空
ま。おんま。今案山四郎が残毒を。おんま。
が。おんま。徳壽が冤を雪。おんま。金を。

蟻王を生拘く。ふく飲び。その後とて十二人。寺谷より
西より入る。鞍馬跡へといそがむとて。蟻王もよく由りて
或る蕉火をりちりて兵士を罵り。あつひと索執の兵士
を倒し踏みどる。何れも衆皆大死よりくあす。首を
刎ぐを。實檢入るとて。憤るりの中。あつひと
生拘を私に殺しつ。後難脱とぞけん。さうくその後とて
くあつひとあつひと。老るりのよ練められく。やうやうよ
之。さまぐよ。路の何と十四五町由來つとんとあり
よ。牛若とてやあつひと。跟さく。忽地と追ひ逼りあつひ
かん佩刀を抜翳しつ。走りか。矢度と二三人を砍らん
あつひと。さまぐよ。驚死騒ぎ。手みく。又をうち振る。真中
あつひと。噓と叫びく。砍く数多。牛若もりのよあり
ど。右よりあつひと。左に柱え。縦横を身よ。戦ひく。瞬息
向ふ。命を預るりの八九人。その餘のりのよ。深痕負ぬあり
け。告知よ。牙丈六尺あつひと。あつひと。荒法師。白綾の袈裟を
頭を裏と。小貝足のえよ。墨線の色を被く。白柄の長刀を
うらむとつ。松の樹蔭より跳り出。袈裟をうらむ。鯛さく。
きりきりんととととと。牛若もりのよ。柱る款を撃つめあり
何れも。ゆりゆりよととと。あつひと。柳笛を吹く。焦燥あり。蟻王も
縛らんと。手と利くね。踏むととと。走り。荒法師の
尻目見えく。丁と突き。長刀の徽よ。蟻王を助うととと。忽地
尻居よ。礮と坐す。法師の徳書を小腋よ抱く。往方もとと

あつひと。噓と叫びく。砍く数多。牛若もりのよあり
ど。右よりあつひと。左に柱え。縦横を身よ。戦ひく。瞬息
向ふ。命を預るりの八九人。その餘のりのよ。深痕負ぬあり
け。告知よ。牙丈六尺あつひと。あつひと。荒法師。白綾の袈裟を
頭を裏と。小貝足のえよ。墨線の色を被く。白柄の長刀を
うらむとつ。松の樹蔭より跳り出。袈裟をうらむ。鯛さく。
きりきりんとととと。牛若もりのよ。柱る款を撃つめあり
何れも。ゆりゆりよととと。あつひと。柳笛を吹く。焦燥あり。蟻王も
縛らんと。手と利くね。踏むととと。走り。荒法師の
尻目見えく。丁と突き。長刀の徽よ。蟻王を助うととと。忽地
尻居よ。礮と坐す。法師の徳書を小腋よ抱く。往方もとと

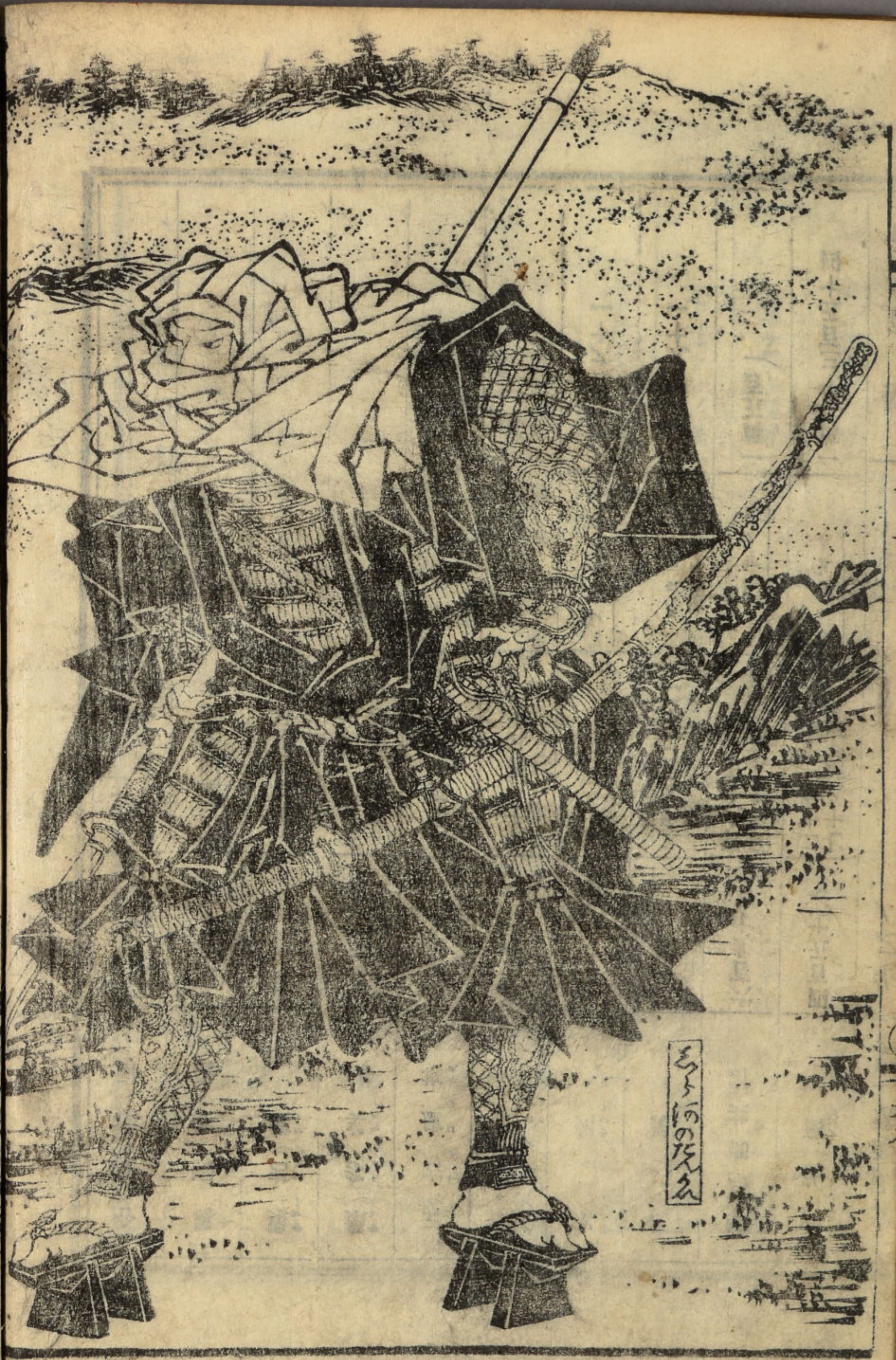


○ 港海
途下
徳島丸
とく

まの
まの
月乃
まの
まの
まの

七
八
九

二
三



まの
まの

るりより。この法師の維。彼鬼一か。の弟子。白河の謀。海。るり。

中山堂

一 十	二 十	三 十	四 十	五 十	六 十	七 十	八 十	九 十	十 十
十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十
二十一	二十二	二十三	二十四	二十五	二十六	二十七	二十八	二十九	三十
三十一	三十二	三十三	三十四	三十五	三十六	三十七	三十八	三十九	四十
四十一	四十二	四十三	四十四	四十五	四十六	四十七	四十八	四十九	五十
五十一	五十二	五十三	五十四	五十五	五十六	五十七	五十八	五十九	六十
六十一	六十二	六十三	六十四	六十五	六十六	六十七	六十八	六十九	七十
七十一	七十二	七十三	七十四	七十五	七十六	七十七	七十八	七十九	八十
八十一	八十二	八十三	八十四	八十五	八十六	八十七	八十八	八十九	九十
九十一	九十二	九十三	九十四	九十五	九十六	九十七	九十八	九十九	百

俊寛僧都嶋物語卷之五 中山堂

